

近の帰化人や文之玄昌の門人達であった。確認は出来なかったが、僧侶も漢詩句作者の一部をずっと占め続けて来たに違いない。この僧侶の漢詩を県下で最初に利用した記録が大慈寺での「和漢」の催しであろう。朝山凡灯庵と大慈寺の僧が「大慈八景詩歌集」さながらに連歌を巻いて行くという華麗な試み、これが県下の和漢（漢和）連句の幕開けであったに違いない。そして、これも又、記録上の盛時、家久の時代から百数十年も昔のことなのである。

島津第七代久元の時代、志布志は南九州の中心都市となった。大慈寺は、この時代の文学活動の中心となっていたが、そこに関わって行われた漢詩文を中心とする文学は、江戸時代初期の家久・光久時代の遙かな起点であったと言えるのである。

（注一） 卷之六十。

（注二） 昭和四十七年三月。

（注三・四） 『五山文学全集』 版によった。但し、本稿において、全引用文で、常用漢字体の浮か

ぶ漢字は旧漢字を改めてある。

（注五） 県下における景勝画賛は、坊津八景に始まっている。信輔の配流期間は文禄三（慶長元年。

（注六） 一般には、明応九（一五〇〇）年、政治家・尚通父子が江州に逗留した時に始まるといわれる。

（注七） 卷之六十。

（注八） 『国史大辞典』によった（平久保章氏執筆）。

（注九） 卷之二。

（注一〇） 卷之五。

（注一一） 卷之二十六。

（注一二） 卷之四。

（注一三） 卷之十七。

（注一四） 『後編旧記雑録』 卷二。

（注一五） 同書卷二十六。

（注一六） 卷之十七。

（注一七） 『後編旧記雑録』 卷三十五。

（注一八） 同書卷七十七。

（注一九） 同書卷八十一。

（注二〇） 五つとも『附録旧記雑録』 卷二十三。

本稿に直接出ていないが、八景詩について矢嶋徹輔氏に御教示をいただいた。記してお礼を申し上げる。

まつしきは身の程を□引かまへ 久元

茶うすはかりの数奇のよそほひ 家久

月にたゝ石をきりぬる江戸のは、 光久

身にしめつゝも普請する人 重頼

楽寧奈草臥 貞昌

老のあはれにのほる一坂 利昌

箱根患視足<sup>墨本マ、</sup> 為善

橋なき川を渡るくやしき 重頼

さとのほうよくく杖にすかるらん光久

童子ともなふる咲しき 忠直

七月のおとりの庭の人おほみ 利昌

はやり小歌の袖は<sup>うろひ本マ、</sup> 家久

繰者謀無極 為善

亡敵喜帰陣 貞昌

あつもりをうちたる人のものかたり 蠅妙

念の入たる冬のふるまひ 重頼

能のよき鷹は鳥をや取ぬらん 利昌

天下太平晨 安心

五十韻である。この和漢俳諧で漢詩句を詠んだ者とその句数は、貞昌九、為善八、安心四である。最初と最後は三人が並んで詠んでいる

が、二回目からは安心が何回も放棄した風になっている。自由に、出来たところで詠んだのであろう。漢詩句の総数も二十一で、すこし不足している。

#### ま と め に 代 え て

以上、県下の景勝画賛詩と和漢連句を紹介して来た。

景勝画賛詩については、叙一、八景二、十境一、十二景二、六景一を紹介して来た。県下の景勝画賛詩は、光久の時代、黄檗宗の僧に依頼したものから始まったようであるが、志布志大慈寺の「大慈八景詩歌集」はこの時代から三百年弱も前のものであり、形式も詩歌集であった。この詩歌集としては鹿児島八景が伝えられているのであるが、「大慈八景詩歌集」は七言・五言の律詩も交えたものであったようで、漢詩ももつと多様であつたらしい。今川了俊は「大慈八景詩歌集」を作ることで南九州を支配していることを宣伝しようとしたと見るのだが、この作品によつて志布志は南九州の中心地となったと言っても過言ではないのである（その権威は「詩歌集」として鹿児島八景に伝えられている）。

和漢連句については、元久時代の記録一、貴久時代の百韻懐紙一、義久時代の百韻断片一、家久時代の百韻懐紙三、同半端物二、五十韻懐紙一、世吉懐紙一、句記録二（忠恒時代）を紹介して来た。家久の参加したものが大部分であるが、家久の時代、漢詩句を詠んだのは側

直しの座をもったのである。このように想像すると、五十五という句数も、前と合わせると百十余句になるので、このあたりで打ち切りとすることになったのかも知れない。五十九句、五十五句のこの二つの漢和連句の形式は、意外に軽く扱われた可能性もなくはないのである。この連句での漢詩句の作者の句数は、貞八、安七、為七、尚六である。

最後に「倭漢之誹諧」と記された懷紙を記す。

鶯のなこやかになく初音哉	家久
林暖好遊申	貞昌
永日興存外	為善
みるにおとろく空のかみなり	光久
可恐松木下	安心
つねに聞ぬる所冷まし	久元
秋霜亀足往	貞昌
夜月囊頭巡	為善
長旅にひへの入こ者 <sup>ホマ</sup> 大事なり	利昌
かうそさんをはたえす嗜む	重頼
医道者の大きんちやくはみちなりや家久	
顧吾伊達倫	貞昌
乱時何様働	為善

飛車かくきやうをつかひこそすれ	光久
左右懸王手	貞昌
立入事のしけきん <sup>中</sup>	利昌
諸国よりおさまるみつ <sup>ママ</sup> き夢あへて	重頼
響看 <sup>ママ</sup> 戲月人	安心
江を遠もかさぬる酒の秋のふね	久元
颺伝笛声頻	為善
聞楽心成蕩	貞昌
はれやかなりし御座のよそほひ	重頼
霞ぬる玊物やた、つとふらん	利昌
目出度唯春	為善
祝只賞餅汁	貞昌
上戸ともこそおこす述懷	光久
度々に喧嘩するこそ咲しけれ	利昌
ものをもしらぬ人のよりあひ	重頼
<sup>ホマ</sup> 唐南蠻界姦	為善
<sup>ホマ</sup> 長崎	
天下船集津	貞昌
綾にしきひらうとしらかの参るらん <sup>光久</sup>	
堪羨福盈隣 <sup>ヒヒ</sup>	安心

広きかたへの野へのみち芝  
 行人鞋翼倦  
 老妾釵頭衰  
 みるにさへ鏡のかけははつかしみ  
 立よるも又いさきよき池  
 岩たゝむ砌の滝のなかれて  
 よとめるかたは水そ漸れる  
 鴛恨朝陽薄  
 虫添秋夜悲  
 里くに更て擣ぬるあさ衣  
 愛月独眠遅  
 深隠避塵慮  
 をしへの道をしたふ法の師  
 ともし火のつねにみえぬる寺のうち重  
 生松琴韻颺  
 花前春興満  
 梅下暗香随  
 三  
 またきより開く朝戸の年越て  
 ふりもたまらぬあは雪の墀  
 召霽青山近  
 初秋紅暑遺  
 重 貞 安 利 久 安 貞 為 忠 安 尚 祐 貞 為 春 家 久 利 安 貞 重

天辺新鴈叫

為

これも百韻の形式であるが、五十五句しかない。初折八句は揃っているの、「天辺新鴈叫」より後が切れているのであろう。

名前であるが、上の一字を残して、下の字を省いてあると考えられる。すると、貞は貞昌、家は家久、安は安心、為は為善、尚は尚純、忠は忠張、重は重将、利は利昌、久は久元、祐は祐昌となる。問題は春であるが、これは久春が久元に久を譲って、下の字を記すことにしたと考えたい。

このように作者名を推考してみると、この連衆は、この直前に紹介した五十九句の漢和連句の連衆中、光久を欠くだけということになる。そこで、筆者は、この漢和連句は、五十九句の漢和連句の後、光久が退席した後、時間が余ったかして、再度巻かれたものではないかと考える。

前の漢和連句を巻いて時間が余ったということであるが、実は、前の五十九句の漢和連句では、尚純の「奢拳益憎崇」が重出している。従って、先には後半が切れているかと記したが、尚純の番が巡って来たところで、彼が重複を犯したことを申し出て、そこで打ち切りになったのかも知れない。それにしても、宗匠や執筆は何をしていたのか。あれこれと変な興味は湧いて尽きることがない。

ともかく、光久はつきあえず退席したと思われるが、家久達は巻き

昌七、安心七、尚純六、為善六（外に不明二）となる。この連句でも漢詩作者四名が、順は異なりながら、一回目、二回目と同数で詠んで行っている。

貞昌、為善は漢詩句の常連である。

安心は伊地知安心か。文之玄昌の門人。猶、寛永七年の「懷旧」の和漢連句では和歌句を詠んでいる。

尚純は明らかにし得ない。

次の漢和連句は名前が省略されて一字になっている。

青白昼松雪

貞

山もと水のさむき漪

家

秋更るなかれの月に舟うけて

春

霧晴江色寄

安

千林楓似錦

為

万里杏招扈

尚

「あつ人つとふ宿まれる袖は」霞に明はて、

忠

いつるひかりの長閑なる比

重

村鳥ウや声する方にあさるらん

利

かよひ馴にし竹のした達

久

誓深連理契

安

恩厚合歡嬉

貞

かしこきや国のたすけと成ぬらん

祐

道しある世につかへぬる時

春

九重のうちなをつとふこし車

家

舜日政熙々

為

十雨帯風静

尚

残秋涉苑跼

安

吟身飄冷袖

貞

月にたはふれ情くみ知

忠

帰るさを忘暮しつ花のもと

重

不絶砌黄鸝

尚

二  
春景誘遊窮

為

友もしたしくよむ歌は誰

利

つくりそへてけふ祝言の折ならし

久

はこふみつきのたえぬ差

祐

しつかなる波に出入湊ふね

春

みつしほはやく月そ移ろふ

家

物換秋将暮

安

渾濛霧蓋涯

貞

豈量天地理

尚

只察古今治

為

おこたらず廻るはかりの使にて

忠

わたせる舟の綱手をう拍

久春

市人帰路急

尚純

国相正朝功

為善

徳盛鳳将降

安心

はこふみつきのゆき、忠しさ

祐昌

道のへにたてる車の数おほみ

重将

つとふ物見はたえぬ大宮

家久

庭火烧ひかりはこ、にかしこにて

利昌

夜闌祭已終

貞昌

すみのほる月に行衛やしたふらん

光久

秋色顕山嵩

尚純

唧々草頭蟀

為善

咆々芦底鳴

安心

いかはかり真砂のみちのとをからん久元

やとりをいそきいつる朧

忠張

とりあへず酌さかつきの名残あれや久春

臨別嘆無窮

為善

弘又涙痕満

貞昌

難面もた、おもはるる中

重将

つもりぬるうらみをいつか語らまし家久

さすらふ袖にをく露の虹

利昌

月寄謫居思

尚純

ひとり秋行旅そ伸る<sup>ホノマ</sup>

光久

わかれつ、跡に物おもふ比なれや

祐昌

隔雲西復東

貞昌

尋花忘世慮

安心

種抑愛天工

為善

三  
鶯のミきりをちかみ声そへて

忠張

さかきにつ、く里豊なり

久元

なひきあふ水の烟の立のほり

重将

本ノマ、  
奢拳益憎崇

尚純

おろかなる身をしる罪やいかならん家久

程ふりつ、もむをそ忠まふ

久元

けちめなく国のゆくゑは治りて

忠張

民抔楽秋豊

安心

酌月村々酒

貞昌

五十九句しかないが、形式から百韻連句であつたと見られる。初折八句は揃っているので、「酌月村々酒」の後が切れていると考える（猶、次の懷紙を参照）。光久は、『三国名勝図絵』では漢詩を作る太守といった風に見えるが、連句では和歌句を詠んでいる。

残っている部分で漢詩句を詠んでいる者とその句数を挙げると、貞

たゆるおもひのまはら歌つ

家

物やみもおこたる折に成けらし

元綱

あひみそめにし身は無為

政徳

松統子孫翠

嶺

時もすなほに国そ治る

重長

百韻連句である。この連句で漢詩句を詠んだ者とその句数を挙げる  
と、嶺南十一、玄碩十、貞昌十、頼景九、宗台九の四十九句である。  
これに冒頭の夢想の一句が加わって、半数の五十句になるというので  
あろう。二巡りまでは整然と順を追って詠み、三巡り目から順序や句  
数が乱れて行くのは、この直前に挙げた連句にも認められる（より整  
然とした印象ではあったが）。

貞昌・頼景は既に記した（玄碩も）。

嶺南は飢肥出身の臨済宗の僧崇六であろうか。但し、嶺南は京都妙  
心寺で寛永二十年に示寂している。

宗台は明らかにし得ない。

次の漢和連句には光久も同座している。

松雪宿花鶴

貞昌

春まつ峯に月いつる空

家久

越ゆかん冬の山路の雲晴て

光久

植筍吟景濃

安心

村涯流水潔

尚純

浦外彩霞汎

為善

あさな／＼みす捲袖はのとなり久元

梅のにはひをさそひくる風

忠張

こゝろをもあらためにたる年越て

久春

幾久しさもいわふ老か躬

重将

るひ広くさかふる人やたゝならん

祐昌

いて入しけき興津うら幢

利昌

鶏使掉歌駭

安心

鯉教書信通

貞昌

誠敦尤感范

為善

奢拳益崇<sup>博</sup>

尚純

おろかなる身をしる罪やいかならん家久

法のをしへの寺の缸

光久

経巻対宵永

貞昌

管絃然月濛

安心

雲林秋気爽

みるかうちよりはるゝうす霧

久元

流いつる水上とをく明過て

忠張

結盟双枕支

玄碩

別をしそふはつらき鐘のこゑ

政徳

なみたの露そ袖に齋める

元綱

独歩黄昏月

貞昌

折侍えつ、うき玉祠

重長

山浅知幽寺

頼景

峰尖聳嶮崖

嶺南

乗る舟のよるへを波に定かね

久充

闇深奈腥渥

宗台

さひしさや軒にしたゝる夜の雨

元綱

かたしきわふるまくら悲

家

せめてさは文ほかへしもありねかし重長

恋意愈添思

貞昌

吾髪乱情緒

嶺南

誰愆陷奈聲

宗台

ゆるされぬ罪のむくひはいか計

久充

一瞬劫三祇

玄碩

あまをとめ袖のかさしも妙にして

家

さき散花やみよし野の蓉奇

元綱

おり／＼に春のあらしやすさむらん政徳

篇外費吟鸚

頼景

剥尽健陽力

宗台

迎胆洛汭耆

玄碩

影たかく澄みのほる月にうちむかひ重長

えらふに秋のうたそ寅む

家

四 擁書胸霧散

貞昌

寄信故郷辞

嶺

わけつ、もたとるは京都の山辺にて元綱

いくすちならしみちそ伺

政徳

仙栖雲靉黠

玄碩

漁蕪水漣漪

宗台

更静砂鷗睦

頼景

何忙杜燕姿

貞昌

またきさく花はみきりの色々に

家

すゑ葉みたる、青柳の糸

元綱

返す日のみちの往来やしけからん

政徳

溝洫倦民疲

嶺

諸人のすゝみなれたる月のもと

久充

ならず扇にいつも追む

重長

舞殿好飄袖

貞昌

后宮屢彈琵琶

玄碩

待君終夜涙

頼景



ねくらにつれて鴉とひ之

執筆

月更る森の下風吹おちて

家久

むすひもとめぬ露の道芝

宗佐

浅冷霜彰忽履<sup>本マ</sup>

嶺南

妝晩下薫惟

玄碩

梳髪掩明鏡

貞昌

た、一ふしをうたひ貽せり

元綱

ともなへるなさけにしはし酔臥て

久充

旅の名こりに留ぬる騏

重長

逢花忘日暮

頼景

愛柳到指塀

宗台

二和氣懷氷泮

玄碩

あさり捨つ、ねふる白鷺

家久

村遠き荒田の原のあせつたひ

宗佐

扶筇感盛衰

嶺南

越てこそおほゆる山の高きなれ

元綱

分雲跡幾窺

貞昌

雨はれた風のをとも過けらし

重長

軒端をつたひすかく蜘蛛

久充

又秋驚葉落

宗台

片月満林虧

頼景

人道慮天識

嶺南

儒窓映雪孜

玄碩

冬籠りこすまへ袖の朝ふらけ

家久

春待あへすにはふ梅か枝

宗佐

百喜声何日

貞昌

空はほのくうちかすむ時

元綱

おもほえす□年やはやからん

久充

なへてそいはめめる扨

重長

薰琴民与楽

頼景

芸簡学能知

嶺南

曾話灯挑尽

玄碩

至尊座却昇

宗台

打つる、行衛は同じ車にて

元綱

かしこき袖をしたふ恰

家久

いとけなく手習ことの浅からす

重長

切磋日励師

貞昌

照花春夜月

嶺南

胡蝶のねたる露の陣<sup>三</sup>

久充

霞衣多湿錦

宗台

旅席幾催醺

頼景

稀にしも問くる人になれく<sup>て</sup>

家久

愁情胸裏填	一ト
陰晴湖上鏡	玄碩
羽風も寒き鴛の員々	元綱
霜重青山老	一ト
空清明月円	貞昌
草々の露や露とし深からん	家久
秋のしくれそさなく旋れる	重位
高峯邊聳首	一ト
しけるこすゑをしたふうつ蟬	家久
入かたに成日の影は静にて	重位
ともに立まう袖そ聯る	元綱
長歌呼万歳	一ト
おさまれる代の例をそ牽	重位
宴花遊有以	貞昌
その、こてふのみたれてそ翩	安綱
春景随風散	一ト
旅窓過隙湍	玄碩
望帰行客喜	貞昌
足とき馬にうつ捨る鞭	家久

九十八句しかないが、形式から「ゆふたちの」の句の前に二句あつ

たと考えられ、百韻連句であることは間違いない。この連句で漢詩句を詠んでいる者とその句数を挙げると、一ト十七、貞昌十六、玄碩十五である。全四十八句であるから、切れている部分に二句の漢詩句があり、漢詩句が半分を占めていた可能性が強い。この連句の詠み方の特色は、玄碩・一ト・貞昌の三人が一回、二回、三回と、基本的に同句数で詠んでいることである。従つて、座は整然と順を追つて進められたと考えられる。

貞昌以外の二人、玄碩と一トとは、残念ながら明らかにすることが出来ない。

又、「夢想」と題された和漢連句もある。これには、冒頭に「仁義欲開口」という夢想の一句が据えられて、次に続いている。

みちしある世の秋そ僖	家久
もる人も月に戸さ、ぬ關こえて	宗佑
帰則鴈来池	嶺南
霧霽漸佳境	玄碩
里群儘至岐	貞昌
早田よりおくて田かけて殖わたし	元綱
ふりつ、きたる五月雨の比	久充
響くる滝津なかれのすゑ遠み	重長
棧危樵子蚰	頼景
乱岸雲五七	宗台

世をのかれたる人の賢さ	重位	待暮は哀なりけり虫のこゑ	家久
をこなひは朝な夕なにをこたらて	元綱	忍ふ草をやつみも捐まし	元綱
ひめをく法のみちや伝ふ	家久	満拭万行涙	貞昌
遙なる雪の太山を思ひやり	安綱	なくもさひしき山鵲	家久
花飛争後光	玄碩	いにしへの夢は跡なき柴の庵	重位
費吟消永日	貞昌	松は木高くたち駢ふなり	安綱
貧醉賞新年	一卜	住吉やいはひ置たる神さひて	元綱
こゝろむる筆やすさみの友ならん	家久	鑿耕禱太平	一卜
たのしむ宿はよはひ延なり	重位	願聞呈瑞鳳	玄碩
遊必江頭月	玄碩	山翔欲竄鳶	貞昌
冷淡池上漣	貞昌	木葉ちる森の下風吹落て	家久
三 葉零林影少	一卜	うら枯はつる草そ眩る、	重位
叢裏社盟堅	玄碩	玉飛欣為友	一卜
焼火かとみえて暮れはとふ蛩	元綱	暮をかけつ、猶小たか□	元綱
袖も涼しきみなと江の船	家久	里とをきかた野の末や広からん	安綱
山近きかたより風の吹出て	安綱	喰霞養拙全	玄碩
前蜀在欄前	玄碩	出し世のうさを忘る、花のもと	重位
猿叫行宮懶	貞昌	長閑にすくる風は笙し	家久
かり寝のまくらむすひ攢ふ	重位	櫛 <sup>四</sup> の戸をひらき置たる朝ほらけ	祐昌
思郷眠不得	一卜	送別儀未乾	貞昌
対月意難宣	貞昌	玉章に深き心をあらはして	元綱

政統は鎌田治部少輔であろうか。政富の子。慶長二年の生まれ。寛永十四年から家老。

為足は明らかにし得ない。

江戸時代のもとと見ているが、年月不明のものが五つある。<sup>(注)</sup>

ゆふたちの跡は□□□

嶺晴月杳連

玄碩

捲簾秋意足

一ト

暖酒社遊禪

貞昌

かつ／＼も落る紅葉の木のもとに

安綱

しはしか程はやすらへる阡

重位

分のはる山ははるけき袖ならし

家久

さし捨てし裳をける柴船

元綱

晚来勞渡遠

玄碩

灯幽惱旅眠

一ト

夢教風使駭

貞昌

敷わひけりな夜はの小筵

家久

間近くもなくハあなかまきり／＼す元綱

や、夕かけの月に憐

安綱

楓軒涼氣過

一ト

竹榻水潺

玄碩

山かけの住家はみる清かれや

重位

俸後意何悵

貞□

時めける花をみやこの春の空

家久

興隨揚柳天

一ト

二本マ、  
檐温鶯語緩

玄碩

影さやかにもひかり遷ふ

元綱

むら雨ハそゝき／＼て過けらし

安綱

人けもうとくみゆる荒小田

家久

水枯流較冷

貞昌

樓霽月猶鮮

玄碩

鴈影帶風連

一ト

みねより峯に雲を懸れる

重位

雨はたゝみるか内にも降めぐり

家久

すゑはるかなる里の中川

安綱

岩尾半靡頭

玄碩

山腰小路穿

一ト

鐘幽知遠寺

貞昌

鐘内煮甘泉

玄碩

埋火のあたりや馴もまさるらん

家久

数喫愛茶煙

貞昌

松籟塵心断

一ト

月むかしそかたり出たる	久充
ひらきぬるさうしになかき夜も更ぬ	家久
露のまもなき宮つかへ人	為善
惜戚秦亭修	為足
偃武漢皇恢	貞昌
從令軍將袒	為善
懷仁民可徠	元綱
はかりことめくらすこゝろあさからて	政統
爭半囲碁陪	貞昌
花砌品遊戯	家久
霞にもるゝいと竹の声	久通
春尚驪山楽	貞昌
棧群蜀道猜	為善
杜鵑加客恨	元綱
雨やとりするけふのつれゝ	久充
待になを都のつてのうとかれや	祐昌
へたゝる中の盟りはかなや	貞昌
惱我御溝葉	政統
遺孫令月槐	為善
得秋涼滿閣	

手に馴にたるあふきをく比	久元
あかなくも旅の名残のいかはかり	家久
帰程夢裡纔	為足
たのめてもあたなるはたゝうしつらし	元綱
いかけなきをはなにおもふらん	久充
えらひをく其しなくの大和歌	久元
昔日慕奇才	久通
深隠常支枕	政統
なきをかそへて涕もろなり	元綱
花唯同歳々	為足
咲みたれたるつゝしやまふき	家久
春雨の露をきこほす比なれや	祐昌
簾捲影堂珊	貞昌

百韻であるが、この連句で漢詩句を詠んだ者とその句数を挙げると、  
 貞昌十三、為善十、為足十、久通九、政統八、である。漢詩句が丁度  
 半数の五十ある。

貞昌、為善は既に紹介した。久通は島津図書頭久通。宮之城領主。  
 慶長八（一六〇三）年の生まれ。延宝三年に卒す。正保二（一六四五）  
 年から家老。文之の門人である。

窓冷覺秋来	政統
梧葉隨風戰	久通
むかへるかたのやま高き陰	祐昌
峰頭雲似盖	為足
はる、もやかて雨そもよほす	家久
鳩声聞遠近	為善
はやしの竹のおくふかきかた	元綱
可貴賢栖処	貞昌
岩ほつたひのみちかすかなり	久元
愛楓閑駐輿	政統
対菊幾傾□	久通
仙人の秋をいかにとおもひやり	久元
待月屢徘徊	為足
誰か跡と詠め捨たる蓬生に	家久
松風屢外廻	為善
みしゆめもあへすうつゝに成けらし祐昌	祐昌
枕辺涙易催	貞昌
卷かへす文のことはいかはかり	久元
思郷腸欲摧	政統
わひしさはいと、ましらの声にして元綱	元綱
かたやま涯の暮かゝる比	久元

乗興遅歸去	久通
詠詩頻転回	為足
春ふかみあたし梢の花散て	家久
霞のうちにかねそ音する	元綱
報本清明祭	為足
追蹤端午該	久通
檐草搖晚吹	貞昌
ひかりほのめく草ふきのうち	家久
所くあきの螢のかけみえて	久元
露にしなひて竹のむらく	久元
野を遠み霧はけ衣ぬれ増り	元綱
たままつりする里のかたく	家久
臨風添涙月	為善
賞水慰心隈	貞昌
杖破留魚躍	為足
親につかふる道そたゝしき	祐昌
賢きを学ふるすゑのまつりこと	家久
聖則棟梁材	為善
罷釣忽徴呂	久通
褰衣均舞萊	貞昌
あひおもふ友とちも又あつまりて	久元

うらゝにくめるさかつきの員 重長

この漢和連句の形式は世古（四十四句）である。この連句の中で漢詩句を詠んだ者とその句数を挙げると、頼景六、為善六、理心六、貞昌二ということになる。合計二十句で、全句数の半分には二句不足している。

作者の頼景は、仁礼氏、天正八（一五八〇）年の誕生。初名景親、別府小吉と称した。仁礼に改めたのは元和六年であった。文之玄昌の門人。

為善は前川氏を名乗っているが、朝鮮からの帰化人。義弘の代から島津氏に仕えた。光久の子供時代、伴読として作詩法を教授した。

理心も汾陽氏を名乗っているが、郭国安光禹という明の帰化人。永禄二年、来薩し、義久の代から島津氏に仕えた。

次に寛永七（一六三〇）年十二月二十七日に巻かれた「懷旧」の和漢連句がある。<sup>（注九）</sup>

月雪は跡とふ法のひかり哉 家久

感旧傍寒梅 貞昌

軒端ふく嵐は去年の音にして 久元

ねくらにさはく春のとりく 久充

帯霞山向春 久通

迎暖景生台 政統

唱咽調流水 為足

入江はなれてふねそ漕ゆく 祐昌

天晴横鴈陣 為善

田面にかよふ秋風のすゑ 元綱

かつくも柳の下葉うち散て 安心

人氣まれなる露の古みち 家久

月耳老余夏 貞昌

袖に落そふなみたいく度 久元

更にた、やむとしもなき物思ひ 久充

恨深顔不哂 久通

過讒身退屈 政統

金徳意行裴 為足

ゆたかなる世やすゑくもしたふらん

撫琴弄酒盃 祐昌

永日をなかめくらせる花の下 為善

春避凡心埃 元綱

遠きその仏の別哀しれ 貞昌

野守の道をゆきかへる袖 家久

久かたの空にや月の更ぬらん 久充

久かたの空にや月の更ぬらん 久元

遠やまのかすむひかりはほのかにて重長  
霽景眼中連 為善

可愛雲間月 理心

堪臨秋潔渾 頼景

一葉ちるいろはみきはにうつろひて

家久

つなきすてたるかけのつり船 重長

はけしくもすさみ出ぬる夕嵐 貞守

孤村起淡烟 理心

墻頭横竹影 為善

ねくらなからにとりそ眠れる 家久

朝日さす野もせの霜のきえ渡り 重長

ひゝき来にけりすゑの谷河 貞守

機危樵路洪 貞昌

すゝめく／＼て馬に鞭うつ 紹嘉

ちきりをく月はいさよふ里とをみ家久

悲秋恨不鮮 貞昌

思深庭下蟀 頼景

腸断雨中鵲 理心

雲かゝる外山の花のいかならん 貞守

かすみわけ入野は懸なり 重長

春遊忘日暮 為善

歌にしこゝろつくす賢さ 家久

牙琴流水曲 理心

蕃榻海南筌 為善

きぬきぬにゆかりの袖のしたはれて重長

ふかきなさけのほとそ憐む 貞守

しのふるもさき立やたゝ露涙 家久

向夕月嬋娟 頼景

雲外数行鴈 為善

林中復咽蟬 理心

しはしたゝ清水かもとにやすらひて貞守

なかれはるかにつゝくあら小田 家久

柳塘遮栗巷 頼景

つはさのとかに鷺そ旋れる 重長

落霞斉翠岫 理心

細雨洒金椽 為善

いろもなを露の玉しく鞠の場 家久

むへもみやこのあき闊なり 貞守

淀路より月に車やつゝくらん 重長

梯航争後先 頼景

たつね入けふのまとひの花のもと 家久



永祿元年から三十三年後の天正十九（一五九二）年、法印竜伯（義久）が祁答院氏に宝刀竜啼以下を与えた時に、和漢百韻が巻かれている。この時の和漢連句は、

ふりも来ぬ雨をこめたるわか葉哉 竜伯

鵲呼雲上名 花巖

すめる夜は月の宮こも遠からて 晴蓑

の三句だけが伝えられている。<sup>（注一五）</sup>連衆の名はほぼ全員が伝えられていると見られるが、その中で漢詩句を詠んだのは、花巖、黒成、虎岳、瑞岳、宗鶴の五名である。このうち花巖、瑞岳には大願寺住持、後住という注記がある。大願寺は、『三国名勝図絵』によると、黄竜山大願寺といつて、天台宗の十二の坊舎等があったという。鶴田町柏原にあった。<sup>（注一六）</sup>

天正十九年から四年後の文祿四（一五九五）年の『高麗入日々記』には、二回の和漢連句の記事がある。<sup>（注一七）</sup>

書院出来申候而、御移初二而候、就夫和漢一折御興行候、発句腋第三、

庭の雪うつしてしろし興津風 忠恒様

寒陰船入窓 鎌斎

逢間吟曉月 貞昌

（十二月二日）

夜入候而、於書院御月待二、和漢二而候

発句□□□□、

待月に一よを千夜の時雨哉 御句

寒雲満曉更 貞昌

江村山色薄 鎌斎

（十二月二十三日）

鎌斎、伊勢貞昌の外に漢詩句を詠んだ者がいたのかどうか、三名以外の連衆が不明なので、詳らかにし得ない。

伊勢貞昌は、元龜元（一五七〇）年の生まれ。寛永十八（一六四二）年に卒す。文之玄昌の門人。後、家老。

鎌斎は「称名墓志備考」に門司謙桑斎光空とある。大内家から来て義弘に仕え、家久の伴読となったと伝える。

家久（忠恒）の時代、和漢（漢和）連句がよく試みられたようで、江戸時代に入ってから懐紙も七つ伝えられている。

元和十（一六二四）年正月十三日に巻かれた漢和連句を次に挙げる。<sup>（注一八）</sup>

宿梅鶯百喜 頼景

砌にふかき春のあさ天 家久

影薄曙窓月

九高

露置そふるきぬくの跡

貴久

心やはきりのへたつる中ならむ

幸久

こゑのおちくる空のかりかね

忠将

何となくしらふる琴もたゝならて

芳林

湘水載詩船

玄仲

翠竹似鳴玉

智鑑

緑陰宜読篇

智璋

陳八戦図跡

玄盛

はかりことある国そ安けき

幸久

千代もとや誰しも君を祈らん

貴久

かけにまふつる住よしの松

忠将

明石かたたのむ行ゑに舟よせて

忠元

浦風をくる月の夕なみ

房政

霧暗閑鷗外

意外

秋幽双鷺前

正成

何辺姜笛遠

玄洞

専対太才偏

九高

奉勅梅香厚

玄盛

状元花気鮮

玄仲

春は猶心あるへき朝ほらけ

幸久

海山かけてかすむ難波津

貴久

栖老葦間屋

玄隆

門田にそよくかせそ身にしむ

忠元

民事賑秋実

玄啓

客遊賞月円

玄洞

よみかはす歌の席に夜は深て

貴久

こゝろの糸竹のこゑ

忠将

此会合歎毎

正成

政諄海内全

九高

この和漢連句は九高が脇句を詠んだりしているので、寺らしき所で  
巻かれたかと思われるが、詳にし得ない。見るように、漢詩句は五言  
で、五七五に付けば、七七にも付いている。一句だけ漢詩が插まる場  
合もあれば、長くは六句も漢詩が続くところもある。漢詩句の作者ご  
とに詩まれた句数を挙げると、九高十三、玄盛七、正盛六、意外五、  
玄洞五、智鑑三、智璋三、玄啓二、玄弘二、玄隆二、玄仲二、総句数  
は五十句、百韻の半分である。玄を名前の最初に置く者五名、智を最  
初に置く者三名が目につくが、これらは近い師弟関係にあるのではな  
からうか。意外が野村外記意外だとすれば、彼は他の連歌懐紙では和  
句を詠んでいる。とすれば、この和漢連句では漢詩の助人という立場  
を取ったことになろうか。

窓閑云誦易

玄盛

実こんとたにかねてしらせよ

忠将

信為無媒断

正成

跡つけかたき雪のかよひち

房政

乗興廻舟好

意外

入江をひろみなみのすゝしさ

貴久

むら芦の見えみみえすみ暮そめて

兼盛

射箔月張絃

九高

崇枕虫声切

智弘

かりねの野へに秋風の夢

幸久

なみたのみ出し都の形見にて

忠元

つれなや命なに、かゝるか

貴久

自起放籠鳥

玄盛

吟闌聞杜鵑

九高

雨そゝく山さと人の夕まとひ

忠将

こゝろのなきやうきも思はぬ

兼盛

夕方の月のむら雲晴やらて

貴久

攀桂化登仙

九高

蕭索下枝葉

意外

水をのそみて猿やなくらん

忠元

巴江流学字

智鑑

湖岫尖横鋌

九高

もろ共にうかれとはなにわかれまし幸久

おもひやりても今はなくさめ

貴久

春輝雲瑞靄

九高

霞彩月嬋娟

玄盛

花は猶しのゝめおしくうちかほり貴久

羽かせしつかにならす鳥の音

忠元

旅館動郷心

玄洞

儒林警懶眠

九高

みとり子を憐とおもうこゝろさし

兼盛

ふりすてやらぬ世はいつまでそ

忠将

無奈婿姉恨

智璋

あかしかねたるよなくの床

貴久

茅店待鶏拍

正成

隣家有蝶連

智鑑

驅景忘帰路

玄隆

尋花開雅筵

智弘

一盃驚被勸

正成

雪もこほりも今朝やとけまし

忠元

谷かせに岩ゆく水も春みえて

房政

さそなけ色も浦のをちかた

兼盛

殊歌道連歌達者と云、遠国と而其会尺不足に依は如何と而 志布

志大慈寺に和漢有ける

右の「和漢」は和漢連句のことであろうと考える。大慈寺が選ばれたのは、大慈八景が唱えられるような景勝の地であること（加治木・高山方連歌などが後日催されるのも、景勝地の加治木黒川である）と、ここに五山文学の流れの臨濟僧がいたからに違いない。梵灯庵師綱が発句を詠み、住僧が脇を付けるといった形で進みでもしたのであるか。但し、連衆は全く伝えられていない。師綱が下つて来た応永十一（一四〇四）年は、「大慈八景詩歌集」が纏められてから二十五年位経った頃である。「和漢」という趣向は、この地に相応しいということでもあったろうか。

この後百五十年程は全く資料がなく、相州家の時代に入つて、永禄元（一五五八）年九月二十三日の次の懐紙となる。<sup>注四</sup>

雲にふけなれも月をや松の風 貴久

秋夜永於年 九高

蛩韻似催句 意外

初霜ならし暮さむくなる 幸久

旅衣はるかに分る野を広み 忠将

こゆへきすゑや山たかきかけ 芳林

瀑飛聞遠響 玄洞

村落簇疎烟 玄盛

袖ちかく夜るは螢になつさひて 忠元

聞くらしつるうつ蟬のこゑ 房政

はかなしやいつを限の身ならまし 兼盛

餓思首陽賢 九高

道厥古令一 玄盛

喝知無有先 正成

入かたき法に心をつくしきて 貴久

門ものふかし杉の下かけ 幸久

三輪の山尋て行はくる、日に 忠将

河音すみて月いつるそら 芳林

舟とめて汀にふかす秋の風 房政

鐘寒江寺辺 九高

醉遊其季白 意外

食楽独顔淵 玄啓

醉吟如絮乱 智璋

老色似花驚 九高

帰こぬむかしとはかりうち嘆 貴久

ふるきみきりに残るやり水 忠元

山とのみ見えてやちりのつもるらん 幸久

経歳帯雲天 玄洞

相照映

更令巖面

耀於珠

綾織山

松杉弗鬱

好孱顏

朝靄晚霞

映翠鬢

疑織女新

織綾去

落花飛鶴

曝斯山

陰陽師峯

水遠山長

風月爽

林濃松老

古今閑

誰知安氏

尚棲此

襖祓塵襟

令解顏

騰雲

梅山

この紫尾八景詩について『三国名勝図絵』は「貞享二年、乙丑、四月宮之城郷真言宗神照寺に住せる、権大僧都快善法印なるもの、此山に來り、閑居の地を卜するに、古跡の荒壊を哀み、己が私財を出して邑民に告げ、当寺を再營し、朝は遠山を望て心を澄し、暮は温泉に浴して身を安じ、日々杖を曳て徘徊し、四時の風景を以て樂みとせり、元禄十年、丁丑の春、紫尾八景を選び、狩野昭信に請て其図を畫き、諸山の僧、詩を賦し、一軸となして寺に蔵む」と記している。<sup>(注二三)</sup>第二十代綱貴の時代に移り、賛詩の最後となっている。

以上の景勝画賛詩を寺院の宗派別に整理すると、禪宗が臨濟宗の大慈広慧禪寺、曹洞宗の福昌寺、それに真言宗の一乗院、永福寺、神興寺ということになる。江戸時代、黄檗宗の帰化僧に禪宗、真言宗の寺院で景勝画賛詩を依頼するということに始まり、真言宗の寺院が比較的長く景勝画賛詩を求め続けたということになるか。そして、『三国名勝図絵』の景勝画賛詩で最も新しいものが寺院と唯一無関係の、鹿児島八景の和漢の賛ということになっているのである。

# 和漢連句

『山田聖栄自記』に次のような記事がある。

是も元久之御代義満將軍御代 朝山出雲守師綱・同小次郎重綱為上使下向、豊後伝なれは大友親類吉弘殿と而同下に而元久志布志におひて御対面奔走有り (中略) 師綱は天下に隠れぬ名仁也、

筆之山

山如尖指

竹如筆

誰灑谿泉

石墨研

雲霧写成

花木麗

蒙恬不雇

自新鮮

錦之尾

日日林巒

風致新

宜槐宜夏

最宜春

陰雲深霧

染紅紫

豐艸閑花

張錦茵

兩鹿勢

勢如兩鹿

欲隨車

覺秀

天竜

華海

吉瑞長呈

碧水涯

獸是山歟

追不去

雌雄相對

興尤佳

三日月山

清光幽岳

自相宜

林影惘然

處處奇

円欽由來

称此景

就中初月

出雲時

光石

飛泉乱濺

翠蘿衢

峭壁常磨

清景殊

尤愛太陽

石芳

覺眼

## 田浦月

如斯去者竟如斯 海印曾無印破時

買得金漣田浦月 司農未稅至秋期

## 洲崎月

青々祗在水中央 脉々何如乱挿秧

一道白沙低藩霧 松濤風撼半飛颺

## 開聞雪

積雪堆頭方自閑 凜然氣逼斗牛間

莫將富士低昂去 一種威靈別有閑

## 東福城

深塹堅城旧日全 荒蕪今識太平人

名伝東福仍多宝 同陷荊蠻不敢連

## 霧島山

氣焰蒸騰久不消 巨靈照耀徹雲霄

安和仁育東方主 變態無辺脱迹寥

この詩について『三国名勝図絵』は「往昔長崎の高元泰来りて、六景を分ち、詩を作り、寺に蔵む」と記している。<sup>(注二)</sup>高元泰は深見玄岱のことである。深見玄岱は貞享二年に光久の侍読として長崎から迎えられ、市来に居を構えていた。彼が鹿児島を辞して長崎へ帰ったのは元禄四（一六九一）年のことである。永福寺八景の詩は玄岱の鹿児島滞

在中の作品であろう。桜島、田浦、洲崎、開聞、東福城という場所は、二十年程後の前出鹿児島八景でも取り上げられることになる。

さて、『三国名勝図絵』に掲載されている大慈八景から右の永福寺八景までの詩（鹿児島八景を除く）は全て第十九代光久時代のもので、作者も殆ど新しい帰化人（系）である。『三国名勝図絵』には光久自身の漢詩も記され、彼の時代は漢詩が作られた時代と記憶されたようである。この光久は薩南学派の文之玄昌の弟子に囲まれていたのだが、景勝画賛詩には彼等の手になる作品は一つも伝えられていない。儒学や詩の上で言えば、それは一つの時代の変わり目だったのではなからうか。景勝図賛詩はこの時代の変り目をよく表わしているように見える。最後に紫尾八景を挙げよう。

## 胎生尾

安門跡

## 魯生天馬

## 世皆譚

## 苜蓿蹄痕

## 与蘼参

## 緑底如今

## 無看驟

## 清平不要

## 放山南

昔為供奉人清座 今也何妨賃白雲

瑞嶺春日

廟貌崢嶸嶺路斜 青紅棟宇鎖煙霞  
神聰赫々長如在 為瑞為祥祐国家

石窟白山

玲瓏浮寶勝瓊丘 誰立靈祠邃且幽  
自是神祇能護国 故存香火享千秋

三宝珠山

鬱々佳山世所無 千秋屹立對浮図  
幾回夜半日輪轉 疑是神竜獻宝珠

岩間硯水

兩岸寒巖如削壁 稜々瘦骨立千秋  
誰將一滴陶泓水 化作長川無尽流

関白天神

力扶社稷平生志 酷愛梅花千里飛  
喜有欽風同志士 精宮廟宇壯神威

関伽泉涌

頼公德業衆推尊 道是羅師七代孫  
偶爾着衣持密呪 関伽涌出水如盆

門外長溪

走碧梯藍發遠源 泓澄竟日繞山門

不須喚作長溪水 正是琅々演密言

連芳梅花

誰移異種此中栽 不是羅浮瘦嶺來  
両々連芳如仲伯 任他霜雪了難摧

貞享甲子元年、夏四月、既望、云臨濟正宗第三十四世、高泉徹

頭陀書

貞享元（一六八四）年は、福昌寺十二景が作られた延宝三年から九年後になる。高泉は、延宝三年に「扶桑禪林僧宝伝」を選述し、このころはその続編の編著作業を進めていたと考えられるが、八年後の元禄五（一六九二）年には黄檗山五世の法席を継ぐことになる。「伝臨濟正宗第三十四世」と自署しているように、貞享元年には既に黄檗宗の中心的存在になっていたので覺慧が十二景詩を依頼したのであるう。

さて、鹿兒島八景詩歌以外の「三國名勝図絵」の景勝図賛詩は、これまで殆どが黄檗宗の僧侶のものであったが、それ以外のものが二つある。まず、永福寺六景を挙げよう。

桜島旭

紫霧紅霞渡海来 太陽初掛小蓬萊  
赫然氣象天図濶 縦目人依百尺台



竜神聴法隠長川 傾出崖頭百斛泉

非特三根蒙溉潤 香厨足供万斯年

撻黎々

同

石因水擊響冷々 恰似円通現至靈

為報遊人高着眼 到頭休把耳根聴

憩月亭

独吼和尚

群峯羅列輔禪宮 巧構華亭聳半空

明月不従流水去 清光常照到其中

金剛嶺

同

白雲嶺上月三更 老衲焚香度有情

一卷金剛通地府 群靈從此悟無生

延宝三年は、大慈八景詩・十境詩が作られる前後であり、この頃、黄檗宗の四人の僧に詩を依頼するということが流行したように見える。高泉が来朝した寛文元年は宇治に黄檗山万福寺が創建された年であった。諸国にも隠元来朝後、次々と黄檗宗の寺院が立ちつつあった。最新の中国の禅宗や文学への憧れがこの流行を齎したのである。作詩数は高泉五編、悦山三編、南源と独吼が二編ずつとなっている。『三国名勝図絵』によると、右の黄檗宗の四人の帰化人僧による十二景詩の外に「城州宇治興聖寺の住持耕雲が題せる十二景の詩」もあったというが、どのような詩であったか、残念ながら分からない。

福昌寺十二景で一番多く詩を作っている高泉には、如意珠山竜巖寺一乗院の十二景詩の作もある。こちらは序文も付いた形で『三国名勝図絵』に掲載されている。<sup>(注二)</sup>

#### 西海金剛峯十二景并序

日域輿地分五畿七道六十六州、薩州蓋西海道也、其中多形勝、有寺曰金剛峯、乃高麗大沙門日羅公所創、迄今千有余載、而勝跡尚存、天和三年、州守松平大居士、以寺虚席、起総州西光寺上人覚慧公居之、公因謁余於仏国、請題十二景、余於此寺、未嘗遊覧、焉能措辞、公請之不已、姑就其題而賦之、以博高人名士之一咲云

#### 日羅禪石

林間誰置盤陀石 日与羅公静結跏

公去年深石尚在 半封苔蘚半煙霞

#### 加持瓶水

見説開山精秘典 曾将浄水密加持

疇知法力難思議 一滴能令湧四維

#### 太守学亭

邦伯万年德化清 日揮草聖踞斯亭

至今亭際煙雲跡 猶是竜蛇筆陣形

#### 供奉石牀

片々瓊瑤鋪作席 霜摩雨洗絶苔紋

の意を受けて工夫されたものであったので、賛の中で最上の格として受け継がれたのではなかろうか。鹿児島八景が詩歌集として編成されたのは、時の藩主第二十一代吉貴の膝許だったことによるのに違いない。

「正徳・享保の際」とあったが、享保二（一七一七）年には日野輝光が薨じているので、正徳元（一七一）年からこの年の間に作られたものである。

さて、先の大慈八景の作者の説明に「福昌寺の詩もある」と記されていたが、これは玉竜山福昌寺十二景の詩である。十二景については『三国名勝図絵』に「当寺に十二景を分てり、何人の所定をしらず、古よりは是を伝称すといふ」とある。<sup>（注一〇）</sup>十二景についても同図絵に「當時の住寺万年が時、延宝三年、唐土より帰化せる、城州黄檗山の僧、南源、独吼、高泉、悦山等の諸師へ、十二景の詩を分ち請て、是を當時に蔵む」と記されている。「唐土より帰化せる」僧に求めたので、日本人の鉄牛ではなく、隠元示寂に当って、その法衣と自賛の像を受けた独吼となった。さて、その十二景詩は次のようなものである。

竜門橋

南源和尚

洞流陰処設関津 為接参玄湖海人

一躍竜門看変化 拏雲攫霧任騰身

鏡石巖

同

岳々峭壁倚天開 不仮青銅鑄出来

雨洗霜磨塵垢浄 儼如明鏡現当台

智日池

悦山和尚

浮図数級勢嶙峋 智日騰輝億万春

池綻芙蕖香遠近 開天道味美堪倫

深固院

同

山屏垣処啓柴扉 晦跡韜光与世違

万壑千岳収眼底 西来祖意露全機

柳溪瀑

同

透石穿雲勢莫閑 和風和雨落潺湲

西来法脉從茲出 莫作尋常白練看

竜灯松

高泉和尚

道高自古竜神伏 聖跡千秋不可蔵

松際夜深灯一点 照天照地顕神光

座禪石

同

片石峰頭不記年 緑雲冉冉艸芊芊

道人一去無消息 唯見長松勢接天

菅神廟

同

大宋国中参仏鑑 福昌界外現靈蹤

立祠永作伽藍主 千古咸知菅相公

竜献水

同

ひびくくれふかき

この山てらは

海ちかくして

洲崎落雁

前龍山天啓

無限長洲眼界寛

青松聳碧映波瀾

数声鴈々落来処

恰倣天書雲篆看

開聞暮雪

東園権大納言基長

山いく重かさなる

うへにあらはれて

ゆふべさやけき

みねのしら雪

南浦帰帆

前等持承頤

爾屋成封南浦磯

日没烟浪片颿飛

漁翁亦是知其止

釣得遠山佳景帰

桜島秋月

樋口正三位康熙

秋ごとに光を

はなとつきやすむ

島は桜の名に

たてれども

大磯夕照

前真如石鞏

江上鐘愛大磯浦

映帶殘紅勝画図

若夫蘓仙入蓉地

賞心須是換西湖

田浦夜雨

烏丸内大臣光榮

打よする磯辺の

なみもしづかにて

夕さびしき

たのうらの雨

多賀晴嵐

恵峯雲岩

雲散晴嵐明万波

日光相映海山阿

宮前満目好風景

不尽家珍雅興多

「有七言五言皆八句者」を欠いているが、柏庭清祖の編集した「大慈寺の風景を最も好んだ（「叙」による）」という九州探題今川了俊

幾回誤認門前曉 夜半鐘声出上方

潮音閣

同

閣湧碧空容法界 不須彈指引追尋

雪濤影裏宛然座 滿耳潮音贊梵音

拈華堂

仏国高泉

誰建梵堂似鷲山 鋪金抹綠照雲間

金花猶在迦文手 只是無人解破顏

烹金炉

同

此間原是大炉冶 鈍鉄頑銅那敢当

独有黄金終不變 愈烹愈煉愈堅剛

止止庵

南岳悦山

庵中静座豁双眉 指顧溪山分外奇

止止不須開口説 從來我法妙難思

雲秀溪

同

秀麗静溪足練分 広長舌相好音聞

神竜錦鯉為宮殿 暁夕飛騰有彩雲

清涼軒

同

茅茨結構倚山丘 蔽日松篁陰氣浮

長夏渾忘三伏暑 晚來爽納一簾秋

緑池

同

室後鑿成半畝塘 巧心妙手莫能量

一泓烟水鴨頭緑 倒蘸西輪日月光

十境の中、菡萏峯、檳榔島、夜明庭は大慈寺の外にあるものようであるが、残る七つは寺内の建造物、自然等である。天徳南源以下の作者の作品数は区々であるが、「八景詩」と「十境詩」を合わせると、天徳南源が三篇で、残る三人は五篇ずつとなっている。このことから見ると、「八景詩」と「十境詩」は一体のものとして作成されたかと考えられる。

猶、「三国名勝図絵」によると、宝満寺の什宝に桜町天皇より拝領の八景色紙八枚があつた由である。残念ながら、どのような内容のものであつたかは分からない。

柏庭清祖が試みたような漢詩と和歌から成る賛に鹿兒島八景がある。「三国名勝図絵」は鹿兒島八景について次のように説明している。<sup>(注九)</sup>

世に府下の風景眺望の勝を選び、題して鹿兒島八景と云、正徳・享保の際、京師縉紳家、及び諸山の出家に請ふて、其詩歌を求めぬ、

鹿兒島八景が何時頃から言われるようになったかは、具体的には分からない。さて、その詩歌は次の通りである。

南林晚鐘 日野権大納言輝光

かねの音も波にぞ

西塞夜雪

同

冬深夜永月凝光

六出紛々下碧荒

若使三軍親到此

猶疑為主守边疆

この八景詩の表現は義堂周信の「叙」に記されている表現をほぼ引き継いでいる。唯一「漁浦帰舟」が「漁舟帰帆」に改められているが、「帰帆」は前記の通り一般的な表現である。八景の配列は、春で始まり冬で終わるところは一致するが、夏と秋が順序を乱して冬の直前に集まってしまっている。和歌が含まれていないという違いなどもあることは言うまでもない。

この八景詩の作者については前記「志布志町誌」上巻に、

天徳南源 慶長十一、延宝五 「龍山春望」作詩 撰津国分寺

僧俗姓林氏 字は南派 支那福清の人 六十二才卒 鹿兒島福

昌寺の詩もある。

弘福鉄牛 「野市炊烟」「漁舟帰帆」作詩、応永五年石見国に生

る。江戸弘福寺を建つ、七十三才卒

南岳悦山 「橋辺暮雨」の作詩 支那の人、宝永六年卒 福昌寺

の詩もある。

仏国高泉 「東宮秋月」「古寺緑陰」<sup>〈ママ〉</sup>「西塞夜雪」作詩、支那福州

福清県の人、姓は林氏、仏国寺を建つ、福昌寺の詩もある。

(一六三三、一六九五)

とある。但し、鉄牛の生年、応永五年は寛永五（一六二八）年の誤植であろう。「三国名勝図絵」によると、全員黄檗宗の僧侶である。この作者の経歴から前記大慈八景詩は、高泉が来朝した寛文元（一六六一）年<sup>（注八）</sup>から南源が示寂した延宝五（一六七七）年の間に作成されたと見られる。

義堂周信の「叙」によると、柏庭清祖が編集に加わった「大慈八景詩歌集」の漢詩には律詩も入っていたというが、江戸時代の景勝画賛詩は全て七言絶句である。

ところで、「三国名勝図絵」の景勝画賛詩には、八景の外に十境、十二景（六景）といったものがある。大慈寺にも「十境詩」がある。同じく「三国名勝図絵」に掲載されているもので、作者の顔触れも八景詩と同一である。

菡萏峯

天徳南源

菡萏峯如菡萏開 亭々玉立脱凡胎

昔年曾入諸禪夢 感得地無半点埃

檳榔島

同

檳榔島湧寺南隈 常有仙翁採藥来

何処鳴榔明月夜 漁人得意弄潮回

夜明庭

弘福鉄牛

十里汀沙夏布霜 星河臨映散晴光

遠浦帰帆 両向三三 夕陽欲落 家在湘南  
烟寺晚鐘 声度幾峰 喚客歸去 山路重重  
平沙落鴈 風雪歲晏 忽飛冥冥 弋者何篡

（注四）  
というものである。第一句に詠み込まれている定まった表現に比べて

みると、共通するのは「秋月」だけで、「帰帆」が「帰舟」に、「夕照」が「夕陽」に、「夜雨」が「暮雨」にそれぞれ改められ、「晴嵐」「晚鐘」「落鴈」に代えて「緑陰」「春望」「炊烟」が取りあげられている。

大慈八景の表現の特徴は「叙」で解説されているように海に臨み、川や橋のある町の生活とその四季を取り上げたところにある。義堂周信は「好事者」と言っているが、日本の志布志の風土を中国の八景を利用しながら描こうとした、この「好事者」は只者とは思われない。「大慈八景詩歌集」を編集した柏庭清祖は、春夏と秋冬の詩歌をこの集の頭尾に配したかと考えられるが、これもその意図を酌んだ編集と言うべきだろう。

（注五）  
このように大慈寺では日本化されながら、近衛信輔（信尹）の坊津八景、近衛政家の近江八景（注六）よりも百数十年前に八景が定められ、その詩歌が詠じられていたのである。

さて、天保十四（一八四三）年頃に編纂された『三国名勝図絵』は、大慈寺の八景詩として次の詩を載せている。（注七）

竜山春望 天徳南源

山頭雲起欲從竜 勿聴雷声震九重  
倒岳傾湫興大用 沛然法泽瀉三農

野市炊烟 弘福鉄牛

交易向曛人散遲 勿聴玉笛酒樓吹  
青烟乱撩四相合 戸々黄梁夢熟時

漁舟帰帆 同

日霽長州人晒網 村幽孤樹翠成堆  
潮平万頃瑠璃面 訝見仙槎天上來

江上夕陽 同

松門曰曰立斜暉 慣聴蒲牢吼翠微  
風落遠帆望処没 江空水鳥逐潮飛

橋辺暮雨 南岳悦山

兩岸横安鼇背濶 人無病涉往来過  
陰雲抐地黄昏候 俄爾為霖潤物多

東宮秋月 仏国高泉

簷牙堂角露林端 夜静往来倚曲欄  
一片氷輪升碧漢 射人毛骨亦皆寒

古寺緑陰 同

梵王宮殿立何年 烟檜霜杉影接天  
経過乾坤如飮日 火雲飛不到庭前

曰唐。其州郡勝概。以八称者夥。謂八詠者。越之東陽也。八境者。楚之南康也。八景云者。蜀之万川也。楚桃源也。瀟湘也。而悉託文人蹟。故東陽蹟于隱侯之詠。南康蹟于玉局之題。万川蹟于趙公之詩。桃源蹟于祝氏之書。独瀟湘則歌咏図画者極多。若僧史寂音。画工宋度支。是最蹟于世者也。然而彼国也。自三皇氏以降。迄于今。易主者幾姓。更国号者幾世。由是地理郡国之名。沿革紛紜。朝而陵夕而谷。不知其幾千万變。是可惜也。惟吾朝則不然。帝王万世一姓。国都歷代同号。是以州郡山川之名。一命而弗改。永守而弗失。豈非君臣奉仏所致然邪。夫仏之道。固万世不易之道也。尚冀探題公篤愛仏道。如山水之愛。愛而得之於心。得而行之於時上以助王者之化。下以副士庶之望。則羣公歌于詩者。豈止八景哉。予遂取穎氏告者併柏庭説為叙。系以短詩。贈隣菴帰云。瞻彼紫陽兮。君子居之。維氣清淑兮。君子樂胥。有市可隱。有江可漁。春山茂矣。夏木森如。冬宜凌六。秋宜望舒。君子出游。零雨其疎。曰既夕矣。胡不帰歟。眷茲魏闕。歲晏躊躇。君子既帰兮。載巾吾車。羣公有贈兮。維珮璫琚。慎哉十襲。予以賁吾廬。

この「叙」によれば、何時ごろからか「好事者」が大慈八景と称していたとのことである。九州探題今川了俊はこの大慈八景に「題詠」がないことを惜しんで、僧宗久（大炊助平吉）を上京させて、詩歌を求めさせた。康暦二（一三八〇）年のことである。宗久は、將軍足利

義詮の子柏庭清祖に協力を求めて「大慈八景詩歌集」を編集したらしい。

この時成立した「大慈八景詩歌集」は散逸してしまったようである。「叙」によれば「禪林耆宿英納泊公卿大夫能詩詞者」が「一人一景」で大慈八景を詠じたものであったらしい。「詩歌集」とあるように漢詩と和歌から成る。漢詩は七言絶句と「七言五言皆八句」（律詩か）のものから成っていたという。その出来映えについて義堂周信は「雄詞麗句。搜奇摘秀。尽山川風土之美。発草木煙雲之華。雖未一游者。視之宛如在八景図画中。」と評している。

大慈八景の画（詩歌）題も「叙」によれば「竜山春望」「古寺緑隠」「漁浦帰舟」「埜市炊烟」「橋辺暮雨」「江上夕陽」「東宮秋月」「西寨夜雪」の八つであつたらしい。但し、「春望」「緑隠」「帰舟」「炊烟」「暮雨」「夕陽」「秋月」「夜雪」という表現は所謂「瀟湘八景」の定まった表現と異なる。義堂周信も「瀟湘八景」という「四言」があるが、それは、

洞庭秋月	濯吾毛髮	衰氣冷然	欲梯銀闕
山市晴嵐	翩翩酒帟	誰家酒美	欲典春衫
江天暮雪	帰鳥飛滅	不画孤舟	也自奇絶
瀟湘夜雨	遠客吟苦	一点青灯	翳而復吐
漁村夕照	野艇収釣	酒熟魚肥	翁灌嫗笑

# 県下の景勝面賛詩と和漢連句

## ―大慈寺での作品に寄せて―

橋口晋作

志布志にある竜興山大慈広慧禪寺について『三国名勝図絵』は、

京都妙心寺の管下にして、臨済宗閩山派なり、本尊千手観音、拈

華堂と額あり、開山玉山和尚、開基楡井遠江守頼仲なり、

と記している。<sup>(注一)</sup>大慈寺と通称されているが、この大慈寺で漢詩を中心

にした文芸活動の行われたことが、『志布志町誌』<sup>(注二)</sup>上巻に詳しく紹介されている。

今回、筆者は地域研究所の総合研究に参加して新資料の発見を期したのであったが、残念ながらその目的を達することは出来なかった。

そこで、大慈寺で行われた景勝面賛詩と和漢連句に寄せて、県下の景勝面賛詩と和漢（漢和）連句を紹介して、今回の報告としたい。

### 景勝面賛詩

筆者が、景勝面賛詩と呼んでいるのは、八景とか十景とかいって選ばれた名勝（の絵画）について詠まれた漢詩のことである。

先ず、大慈寺のものから紹介しよう。詩そのものではないが、義堂周信の『空華集』に「大慈寺八景詩歌集叙」という文がある。<sup>(注三)</sup>

侍予香。柏庭祖上人。出是集請予為叙。問其事緒。則詳而説之曰。

日州大慈精舎。其地蓋負山而臨海。一目万里。実九州山川第一偉

観也。好事者采其景最絶者八。而見之。曰大慈八景。其曰龍山春

望。言宜乎春也。曰古寺緑陰。言宜乎夏也。曰漁浦帰舟。以詠漁

父也。曰埜市炊烟。以樂市隱也。曰橋辺暮雨。示防卒暴也。曰江

上夕陽。示迫桑榆也。其山城宜月者。曰東宮秋月。所以警夜也。

其宜雪者。曰西塞夜雪。所以戒不虞也。是八者景。無没乎海陬久。

而人莫得知者。会前予州史君源公。以方伯連帥之任。莅鎮是邦。

謂之九州探題公。下車未幾。邦人靡然服之。政以曰理。民以曰安。

公余愛山水。以大慈其愛最。而名一旦聞于世。而恨其有景無題詠。

有道人名宗久。号瞬菴。善歌詞者。邦人重之。与探題公殊厚。今

歲以公所囑。來輦下。告諸禪林耆宿英衲。泊公卿大夫能詩詞者。

各賦八景。一人一景。其詩則有七言絶句者。有七言五言皆八句者。

蓋倣唐三体也。詞則所謂和歌。必以三十一字。為一章。作者多上

公鉅卿也。詩歌共若干首。裒成一編。清祖亦預編次云爾。予閱之

雄詞麗句。搜奇摘秀。尽山川風土之美。發草木煙雲之華。雖未一

游者。視之宛如在八景圖画中。神思冷然。殆欲仙去矣。是時有穎

氏在旁。憐余孤陋。告以叙意曰。夫大海之西距日本数万里。有国